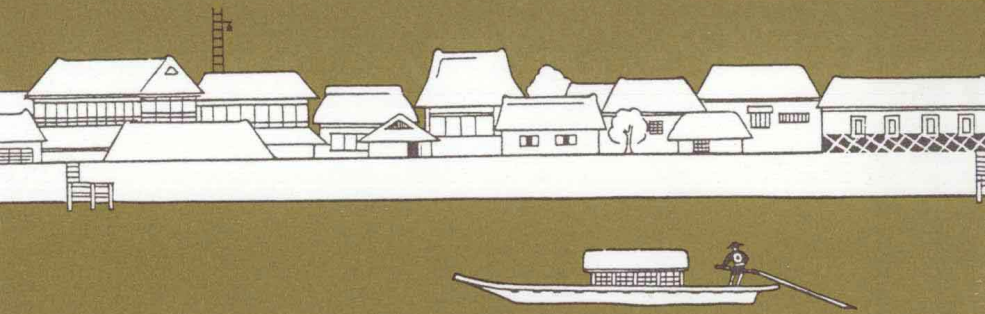
時代小説の時代

中島誠



中島誠

時代小説の時代

現代書館

中島（なかじま）　誠（まこと）

一九三〇年、東京生まれ。
一九五五年、早稲田大学英文科卒業。
以後、フリーライターとして今日に至る。
主な著書、『企業小説とは何か』（大手町ブックス）、『現代思想の文学的領域』（春秋社）、『転向論序説』（ミネルヴァ書房）、『SSS（スリーエス）の文化戦略』（現代書館）等多数。

時代小説の時代

発行日　一九九一年九月二十五日　初版第一刷

著　者　中島　誠
発行者　菊地泰博
発行所　株式会社　現代書館
東京都千代田区三崎町二-二-一一二
電話　〇三-三二六一-〇七七八㈹
FAX　〇三-三二六二-五九〇六
振替　東京二-八三七二五
コード　〇〇三〇-二八四一二-一九三五
写　植　一ツ橋電植
印　刷　平河工業社
製　本　黒田製本所

定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本はおとりかえいたします。
©1991 MAKOTO NAKAJIMA

はじめに

「時代小説の時代」という題を思いついたのは、去年の暮れであった。私の心の中で、政治や経済や情報社会のことが、すっかり色褪せて、興趣を失い、どんどん消えて行く。その替わりのように、『平家物語』や『太平記』の世界が、どっと這入りこんできた。

後白河法皇や後鳥羽上皇、あるいは後醍醐天皇の怨霊が、どやどやと這入りこみ、天狗に悩まされた北条高時や、実弟と息子達を敵にまわす羽目になった足利尊氏、泥田で討死にした新田義貞、意外にお人好しの楠木正成、その他バサラ大名や、公家と武家の間を彷徨する兼好法師などが、いろどり華やかに、吐く息も怪しく、平成と改まったバブル経済の御世に、順序も上下もあったものではなく、かたまって彼岸から出てきて、私の周囲を埋め尽くした。

長過ぎた昭和も、終わってみれば呆気なく、私と三つ違いの新天皇も、大嘗祭まで演じてしまえば、後は何事もなく月日は過ぎて、「はて、味気なき世の中だなァー」と大見栄を切ってみても始まらない。そこへ現われた中世の怨霊達は、やがて、戦国時代の武将の争乱に蹴散らされ、恨みの声を残したまま、江戸の市中を彷徨している。

中世の溢れ者の大群は、近世の江戸や京・大坂、そして三都をつなぐ街道を中心に、浪人・芸人・剣客・忍者・渡世人・遊女・盗人・岡っ引き等々に姿を変え、時代小説の主人公になった。

私は、大嘗祭、隆慶一郎の死、「太平記」という昭和が平成となるここ数年の三題噺を枕にして、二十世紀末の今、なぜ時代小説なのかということを、いろいろ考えてみたい。

十九世紀の半ばを、ちょっと過ぎた当時、世界最大の人口を抱えた江戸のまちは、文芸の世界でも、その書き手と種類が、驚くほど多様になっていた。なかでも、あらゆる階層と職業の人間が書き残した、ぼう大な量の随想・随筆は、現代の時代小説作家に、豊かな話の種を無限に提供している。

私は、時代小説の世界を、あっちこっちと、さ迷いながら、近世から近代・現代を通して、日本の文学史全体を書き変えなくては、とてもおさまらないとさえ思うようになった。

現代の文学には、民俗学、人類学、心理学等の知識を、作品の中にちりばめた新知識・流行学問のモザイク小説が、かなりたくさんある。しかし、それらの学問の方法を真に活用した作品は非常に稀だ。時代小説といわれる作品の中には、未消化ながら新しい学問の方法を目立たぬように使いこなしたものがあって、私は感心した。要するに、時代小説を楽しみながら、なお教えられることが昨今は多いのである。人種・民族のモザイク国家が解体しつつある今、現代文学も一つの危機を迎え、文学全体の屋台骨の少なくとも一端を、危機に抗して時代小説作家達は必死に支えていると、私は思う。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

時代小説の、もうひとつの魅力は、都市化の進む日本列島の各地域で、ひとびとが、自分達のつくったマチに、何か物足りなさを感じている割りきれなさを、そっと満たしてくれることにあると思う。マチづくりをすればするほど、過剰の中の不足とでもいえる奇妙な不安が心の中から湧いてくる。時代小説は、それが何かを教えてくれる。それは、暗闇の街道であったり、砂ぼこりの舞う田舎の宿場だったりする。また、古い義理と人情であるのかもしれない。あるいは、女の甲斐性とか、男の意地というような、たいして自慢にもならない、暮らしの中のこまかな葛藤であったりもしよう。

明治・大正・昭和という近代史のなかで、超えてきたり捨ててきたり創り替えてきたりしたはずのものが、時代小説のあっちこっちに、置き忘れた道端の地蔵さんのように、また、長屋の軒下の共同井戸で洗い物をしながらしゃべりあっている女達の評判のように、なつかしく描かれている。

時代小説は、英雄・豪傑の勝敗を決める場であるとともに、市井の男女の縺れ合いの小ドラマでもある。一方を歴史小説に見立て、他方をメロドラマと扱ってしまえば、途端に時代小説の世界は分解してしまう。私は、この両者を掬いとって混在させ、武士の義理と町人の人情とを、いっしょにつなげたものが時代小説の醍醐味なのだと思っている。

私が、この本の原稿を書き始めた頃に、中東湾岸戦争が終わり、この「はじめ」を書いている時、ソ連の三日天下クーデタが破綻した。

世界のいたる所で、いつ何が起きるか分からないような時代だが、地球上は、大体おしなべて平和である。なかでも日本は平和、というよりは平安だといえる。平和という〝環境〟を、もはやわれわれは意識しないで生きている。つまり、平安なのだ。

国家とか戦車とかいう硬いものは、もうはやらない。鋼鉄の戦車の上にかけ上って旗を振るのも、マグドナルドハンバーガーの店に行列をつくるのも、同じモスクワ市民である。

武士が硬い鎧を脱ぎ捨てた江戸の屋敷から、鎧櫃（よろいびつ）の中に、日頃味わい慣れた醤油を入れ、これを人足にかつがせて、お役目で東海道を下る侍の話が、「半七捕物帳」の中に出てくる。人足の中に悪いのがいて、わざと荷をゆすって醤油を溢れさせ、血が流れたとわめきたてて侍を困らせる。これがほんとうのゆすりであるが、侍は、とうとう人足を斬り捨て自分も腹を切る。おかしいような悲劇だが、作者の岡本綺堂は、実によく江戸時代の特徴を表現していると思う。硬いものと柔かいものが入り乱れる。柔よく剛を制す、というところまではいかないで、中途半端に終わる。それが時代小説なのだ。だから、私は好きであり、平安な中に不安の満ちている現代によく読まれる。

時代小説の時代——目次

はじめに

〈花の巻〉

時代小説は、時代の流れの岸辺で読まれる――9

◦歴史学の大きな変換期に、死者たちの決然とした風貌を描く時代小説。10

◦時代小説の元祖、『仮名手本忠臣蔵』と『東海道四谷怪談』。21

◦隆慶一郎の死、大嘗祭、『太平記』が時代小説の時代を産んだ。34

◦ビジネス時代の足利尊氏。昭和文学の、もう一つの流れ、吉川英治から隆慶一郎まで。46

◦『宮本武蔵』と日本浪曼派のイロニー。二十世紀末は、『太平記』の世界である。59

〈人の巻〉

現代の出家遁世の隠れ家を設計してくれる時代小説――75

◦E・S・モースの見た江戸の住まい。芥川龍之介の『戯作三昧』と、杉本苑子の『滝沢馬琴』。76

◦民谷伊右衛門・机龍之助・眠狂四郎・木枯し紋次郎という系譜。「余は大衆作家にあらず」と言った中里介山の気概と〝無為に堪える名人〟だった志賀直哉の覚悟。92

。『驟り雨』(周平)、『尊徳雲がくれ』(正太郎)、『甲子夜話の忍者』(風太郎)、『鶴屋南北の死』(苑子)、『あほうがらす』(正太郎)、『駈入寺に道は果てた』(左保)、『看板』(正太郎)を読む。 106

〈水の巻〉

時代小説の作家は、いったい現代(いま)の世に、何を書き何を言いたいのだろうか

。木下順二の『子午線の祀り』と隆慶一郎の『花と火の帝』は時代小説の新しい世界を開拓した。 162

。司馬遼太郎の『俄』と『項羽と劉邦』における呪術的思考と合理的実践。 172

。藤沢周平の面白と幅の広さ。『市塵』『三屋清左衛門残日録』『白き瓶』『驟り雨』。 186

。小林秀雄の『本居宣長』は〝江戸時代小説〟である。時代小説はゴミ処理文学か?! 198

。時代小説をつくる求心力と遠心力。 209

あとがき 228

装幀 代田 奨

年代表（江戸時代）

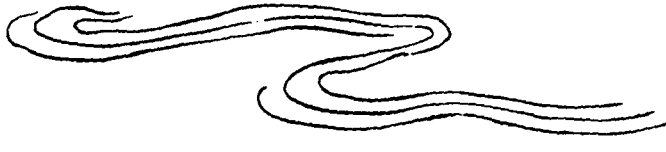
西暦	干支	天皇	将軍	年号
1596	丙申			慶長
1597	丁酉			2
1598	戊戌			3
1599	己亥			4
1600	庚子			5
1601	辛丑			6
1602	壬寅			7
1603	癸卯		家康	8
1604	甲辰			9
1605	乙巳		秀忠	10
1606	丙午			11
1607	丁未			12
1608	戊申			13
1609	己酉			14
1610	庚戌			15
1611	辛亥	後水尾		16
1612	壬子			17
1613	癸丑			18
1614	甲寅			19
1615	乙卯			元和
1616	丙辰			2
1617	丁巳			3
1618	戊午			4
1619	己未			5
1620	庚申			6
1621	辛酉			7
1622	壬戌			8
1623	癸亥		家光	9
1624	甲子			寛永
1625	乙丑			2
1626	丙寅			3
1627	丁卯			4
1628	戊辰			5
1629	己巳	明正		6
1630	庚午			7
1631	辛未			8
1632	壬申			9
1633	癸酉			10
1634	甲戌			11
1635	乙亥			12
1636	丙子			13
1637	丁丑			14
1638	戊寅			15
1639	己卯			16
1640	庚辰			17
1641	辛巳			18
1642	壬午			19
1643	癸未	後光明		20
1644	甲申			正保
1645	乙酉			2
1646	丙戌			3
1647	丁亥			4
1648	戊子			慶安
1649	己丑			2
1650	庚寅			3
1651	辛卯		家綱	4
1652	壬辰			承応
1653	癸巳			2
1654	甲午	後西		3
1655	乙未			明暦
1656	丙申			2
1657	丁酉			3
1658	戊戌			万治
1659	己亥			2
1660	庚子			3
1661	辛丑			寛文
1662	壬寅			2
1663	癸卯	霊元		3
1664	甲辰			4
1665	乙巳			5
1666	丙午			6
1667	丁未			7
1668	戊申			8
1669	己酉			9
1670	庚戌			10
1671	辛亥			11
1672	壬子			12
1673	癸丑			延宝
1674	甲寅			2
1675	乙卯			3
1676	丙辰			4
1677	丁巳			5
1678	戊午			6
1679	己未			7
1680	庚申		綱吉	8
1681	辛酉			天和
1682	壬戌			2
1683	癸亥			3
1684	甲子			貞享
1685	乙丑			2
1686	丙寅			3
1687	丁卯	東山		4
1688	戊辰			元禄
1689	己巳			2
1690	庚午			3
1691	辛未			4
1692	壬申			5
1693	癸酉			6
1694	甲戌			7
1695	乙亥			8
1696	丙子			9
1697	丁丑			10
1698	戊寅			11
1699	己卯			12
1700	庚辰			13
1701	辛巳			14
1702	壬午			15
1703	癸未			16
1704	甲申			宝永
1705	乙酉			2
1706	丙戌			3
1707	丁亥			4
1708	戊子			5
1709	己丑		中御門	家宣
1710	庚寅			7
1711	辛卯			正徳
1712	壬辰			2
1713	癸巳		家継	3
1714	甲午			4
1715	乙未			5
1716	丙申		吉宗	享保
1717	丁酉			2
1718	戊戌			3
1719	己亥			4
1720	庚子			5
1721	辛丑			6
1722	壬寅			7
1723	癸卯			8
1724	甲辰			9
1725	乙巳			10
1726	丙午			11
1727	丁未			12
1728	戊申			13
1729	己酉			14
1730	庚戌			15
1731	辛亥			16
1732	壬子			17
1733	癸丑			18
1734	甲寅			19
1735	乙卯	桜町		20
1736	丙辰			元文
1737	丁巳			2
1738	戊午			3
1739	己未			4
1740	庚申			5
1741	辛酉			寛保
1742	壬戌			2
1743	癸亥			3
1744	甲子			延享
1745	乙丑		家重	2
1746	丙寅			3
1747	丁卯	桃園		4
1748	戊辰			寛延
1749	己巳			2
1750	庚午			3
1751	辛未			宝暦
1752	壬申			2
1753	癸酉			3
1754	甲戌			4
1755	乙亥			5
1756	丙子			6
1757	丁丑			7
1758	戊寅			8
1759	己卯			9
1760	庚辰		家治	10
1761	辛巳			11
1762	壬午	後桜町		12
1763	癸未			13
1764	甲申			明和
1765	乙酉			2
1766	丙戌			3
1767	丁亥			4
1768	戊子			5
1769	己丑			6
1770	庚寅	後桃園		7
1771	辛卯			8
1772	壬辰			安永
1773	癸巳			2
1774	甲午			3
1775	乙未			4
1776	丙申			5
1777	丁酉			6
1778	戊戌			7
1779	己亥	光格		8
1780	庚子			9
1781	辛丑			天明
1782	壬寅			2
1783	癸卯			3
1784	甲辰			4
1785	乙巳			5
1786	丙午			6
1787	丁未		家斉	7
1788	戊申			8
1789	己酉			寛政
1790	庚戌			2
1791	辛亥			3
1792	壬子			4
1793	癸丑			5
1794	甲寅			6
1795	乙卯			7
1796	丙辰			8
1797	丁巳			9
1798	戊午			10
1799	己未			11
1800	庚申			12
1801	辛酉			享和
1802	壬戌			2
1803	癸亥			3
1804	甲子			文化
1805	乙丑			2
1806	丙寅			3
1807	丁卯			4
1808	戊辰			5
1809	己巳			6
1810	庚午			7
1811	辛未			8
1812	壬申			9
1813	癸酉			10
1814	甲戌			11
1815	乙亥			12
1816	丙子			13
1817	丁丑	仁孝		14
1818	戊寅			文政
1819	己卯			2
1820	庚辰			3
1821	辛巳			4
1822	壬午			5
1823	癸未			6
1824	甲申			7
1825	乙酉			8
1826	丙戌			9
1827	丁亥			10
1828	戊子			11
1829	己丑			12
1830	庚寅			天保
1831	辛卯			2
1832	壬辰			3
1833	癸巳			4
1834	甲午			5
1835	乙未			6
1836	丙申			7
1837	丁酉		家慶	8
1838	戊戌			9
1839	己亥			10
1840	庚子			11
1841	辛丑			12
1842	壬寅			13
1843	癸卯			14
1844	甲辰			弘化
1845	乙巳			2
1846	丙午	孝明		3
1847	丁未			4
1848	戊申			嘉永
1849	己酉			2
1850	庚戌			3
1851	辛亥			4
1852	壬子			5
1853	癸丑		家定	6
1854	甲寅			安政
1855	乙卯			2
1856	丙辰			3
1857	丁巳			4
1858	戊午		家茂	5
1859	己未			6
1860	庚申			万延
1861	辛酉			文久
1862	壬戌			2
1863	癸亥			3
1864	甲子			元治
1865	乙丑			慶応
1866	丙寅		慶喜	2
1867	丁卯	明治		3

（中央公論社版『三田村鳶魚全集』より）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈花の巻〉

時代小説は、時代の流れの岸辺で読まれる



歴史学の大きな変換期に、死者たちの決然とした風貌を描く時代小説。

時代小説の「時代」とは、前の世の中、当世よりは少し古びた時代を言う。江戸時代からみれば、室町・安土・桃山の戦国の時代、北条・足利・織田・豊臣が次々に盛衰を繰り返し、勝敗を決してついに徳川家康が天下を統一するまでの、群雄割拠、下剋上の戦乱の世の中が、「時代物」の舞台になる。したがって、明治・大正の世になれば、今度は江戸時代が時代物の舞台であり、昭和になれば、もうすでに幕末・維新・明治の激動期が時代小説の種を提供する。そして、昭和も戦後となり、一九九〇年代の今日からみれば、大正のロマンチシズムも、昭和初期の戦前も、時代小説の舞台に、そろそろなり始めている。例えば、関東大震災直後の大杉栄・野枝夫妻の虐殺や、昭和初めの説教強盗。北条高時役の片岡鶴太郎は、説教強盗も見事に演じた。

江戸時代とか、明治・大正の時代とかいう、「歴史のある標準で区切られた、かなり長い年月」(岩波国語辞典)が「時代」のもう一つの意味であり、時代の流れ、歌は世に連れ、世は歌に連れ、

などという当世・当今が「時代」の第三の意味である。時流のバスに乗り遅れるなとか、時代感覚、あるいはトレンディー、ナウ、ファッショナブル、みんな「時代」の第三の意味で使われる。

かりに、江戸時代という時の「時代」を①とし、時代物、時代小説、時代のついたアンティークな家具という場合の「時代」を②として、時流・当今の「時代」を③とすれば、③に馴染めず、さりとて当世のおのが生き方の運命（さだめ）に身を任せも切れず、時の流れに逆の棹をさして反逆も出来ないような人間が、②に憧れ、これに夢中になることで個人の隠れ家を求めながら、自分の生きる同時代の①を何とか乗り切っていくと言えるかも知れない。

藤沢周平の『夜の橋』という短篇集（中公文庫）の解説の中で尾崎秀樹は、作者の「時代小説の可能性」というエッセイを紹介している。すなわち、「従来の価値観が収拾しがたいまでに分裂し、何を信じていいのかわからないといった今日的状況を眺めるとき、時代小説は何の発言もせず、いわゆる娯楽作品として、状況の外に骨董品のような位置しかもてないのかといえば、そんなことはあるまい」というわけである。

このエッセイは、『周平独言』（中公文庫）の中に収められてある。人間の心の中、本音は昔も今も何ら変わっていない、と藤沢周平は言う。しかし、時代小説には、表現上の一種の約束があり、現代小説とは一線を画す独自のスタイルがあるとも彼は断ったうえで、だが、時には、テーマを現代にとったり、手法の上でも現代小説に近い試みをやってみたり、実にさまざまの工夫を凝らすという。しかしまた、「そこを譲ってしまうと、時代小説が成り立たなくなるという一線があ

って、表現の上のその約束は、やはり大事にしたいと思う」と言うのである。他目には、いい調子ですらすら書いているようで、油汗のにじむような苦労なのだ。

池波正太郎も隆慶一郎も、最近、あっけなく他界した。藤沢周平とこの池波・隆の両人が、実は、現代の時代小説の世界を代表していると、ついこのあいだまで言われていた。だから、一九八一年に発表された周平さんのこの「独言」は独り残された時代小説の名人の言葉として、妙に生々しく胸を突く。ところで、彼の言う、時代小説が成り立つために譲ってしまってはならない〝そこ〟とは何であろうか。〝その約束〟とは一体何か。これから、私は、当代一流の時代小説家が言う〝そこ〟のところを、考えてみたいと思う。二十世紀の世紀末が始まったら、急に、時代小説が流行り出した。一口に言ってしまえば、ブーム到来とも言うべき時代小説繁昌の直接の火つけ役は、大嘗祭と隆慶一郎の死と太平記のNHK大河ドラマ開始だったと思う。この三つの事(こと)は、何となく深い因縁の糸でつながっている。そのことは直ぐ後で触れよう。この〝三事件〟は、どれも大時代の雰囲気が漂っている。「独言」のなかに「時代小説と私」という小文があり、なぜ時代小説を書くのかという質問を時々受けると、周平さんは言う。公害だ、日本沈没だと言う時代に、なぜまた、なにを今更、文政何年なにがしの日暮れ……でもなかろうというわけだ。大江健三郎が『治療塔』を書いている一方で、なぜあなたは『驟(はし)り雨(あめ)』など書くのかということである。対して周平さん曰く、「歴史の未知の領域に想像力がおよぶとき、創作意欲が刺激される」と。だが、彼は続けて、「私は小説を書きはじめるとき、時代小説か現代小説かなどという迷い

を一度も持たなかった。まっすぐ時代小説を書いた」。「ざっくばらんに言えば好きだから書いたというしかない部分がある」と語っている。これは文字通り独言で、だから偽らざる本心である。そこでまた〝好きだから〟という名状し難い難問が出てきた。

好きだからとか、その一線とか、そういう約束事などという言い方は論理的でなく、文学理論にはならないかもしれない。現代に生きる意味を問うていないともいえる。だが、藤沢周平が「歴史の未知の領域に想像力がおよぶとき、創作意欲が刺激される」と言うのは、案外に重大なことかもしれない。その創作のモチーフ自体が非常に現代的なのだとも言える。彼は、時代小説と現代小説とを比べて物を言っている。大衆文学と純文学という対抗意識を、そもそも持っていない。そこのところが面白いし大事なのだと思う。

隆慶一郎の『時代小説の愉しみ』(講談社)は、一九八九年の夏の末に出た。彼は、この年の十一月四日に急逝した。「あとがき」は、すでに東京医大病院で書いている。その「あとがき」で隆さんは(私は藤沢周平を周平さんと、名で呼んだが、隆さんは姓で呼ばせてもらう。その他、諸々の作家を勝手な呼び名で以後登場してもらうので悪しからず)、「どうして時代小説ばかり書くんですか」と、この頃よく問われるが、隆さんの答えはきまっていて、「死人の方が、生きてる人間より確かだからでしょうね」という台詞で切り返したそうだ。「まったくのところ、死者たちの決然とした風貌の見事さはどうだ。長い時間の風化を受けて、その像には鼻は欠け、耳は欠けているかもしれないが、それでも尚、誇らかに己れの志だけは明確に告げているかに思える」。このように言

って、隆さんは続けて、「現代の歴史学が大きな変換期にある、ということも、私の時代小説に対する偏向の理由の一つである」と打ち明け話をする。東大仏文科を敗戦後三年目に出た隆さんは、三十余年のあいだシナリオ・ライターの生活を続け、六十の坂を越してから小説を、それも『吉原御免状』に始まり『花と火の帝』で終わる、ぼう大な量の時代小説を書き、時代物作家としてデビュー後わずか六年で「死者」の仲間に入った。

「死人の方が、生きてる人間より確か」という、その死人の籍に入る直前に、遺言の如く『時代小説の愉しみ』のあとがきを隆さんは書いたわけだが、彼が、現代の歴史学の大変換期と看破(みやぶ)ったいわれは何であったか。

「一口にいって、それは今までの農業定置民の視点に対して、同じ重さで、非農業民の視点を重視しはじめたことだ。きまった土地も家も持たず、全国を放浪して一生を終えた人々。更には海人・山人・輸送業者。こうした一種の自由人たちの眼で歴史を眺めたら、一体どんな様相が展開するか。そこが何ともいえず楽しく、面白い」。これは、二十世紀の世紀末に時代の錆のついた小説が、三百年も四百年も昔の時代に、新しい登場人物を発見した喜びの声ともいえる。

隆さんの絶筆(従って惜しくも未完)『花と火の帝』は、後水尾天皇と、その「天皇の隠密」という破天荒な役を演ずる八瀬童子岩介たちの物語であるが、岩介たちは、まさに非定住非定着の非農業民であり、またそのゆえに唯一の支配者天皇や皇族と最も近いところで働く運命に生まれた、最高権力者に直属する〝自由人〟でもあった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com